

# 分詞構文・再考

## —従来の用法に「手段」を加えては—

酒井 典久

### はじめに

本稿では、筆者が分詞構文に対する従来の説明にどのように疑問をもち、どのような過程を経てその背景にたどり着いたかをお伝えしたい。それから、本稿で扱うのは次のような～ing です。

In space, astronauts must exercise using equipment.

「宇宙では宇宙飛行士は器具を使って運動しなければならない」

### 素朴な疑問

若い頃、分詞構文には疑問がありました。たとえば次のような分詞構文は、とても分詞構文らしい例だと思いました。

Walking along the street, I met Mr. Sato.

「通りを歩いていて、佐藤先生に会った」

なぜなら、この walking は進行形(現在分詞)に直結していますし、walking から進行形の文を起すことができるからです。

I was walking along the street.

「私は通りを歩いていた」

ところが、Not knowing what to do 「どうしていいかわからなくて」の knowing は進行形(現在分詞)に直結していませんし、当然のことながら、この～ing から進行形の文を起すことはできません。(× I was not knowing what to do.)

ここで当時筆者は、進行形の文を起すことができる～ing と起すことができない～ing を同じ分詞(構文)という用語で呼ぶことに疑問を抱くようになりました。

### ひらめき、そして仮説へ

ある日、次のような2つの文を見比べていて、ある発想がひらめいたのです。

「空港に着くとすぐ、私は友人に電話した」

On arriving at the airport, I called my friend.

Arriving at the airport, I called my friend.

「空港に着いて、私は友人に電話した」

ひらめいた発想とは、「Arriving at the airport の Arriving は、On arriving at the airport の On が省略されてできたもので、この Arriving はもともとは動名詞だったのではないか」というものでした。このように考えますと、うまく説明が見つかりました。次の2つの文をご覧ください。

After having done her homework, she went out.

Having done her homework, she went out.

「彼女は宿題を終わらせて、外出した」

この場合でも、「Having done ... の Having は前置詞の After が省略されてできたもので、もともとは動名詞だった」と考えることができます。このことは次のような場合にも当てはまります。

Hearing the news, he rushed out of the house.

「彼はその知らせを聞いて、家を飛び出して行った」

つまり、After he heard the news → After hearing the news → Hearing the news と考えることができます。

当時このようなことを考えているうちに、筆者は「～ingに導かれる分詞構文の中で『～して』を意味する分詞構文は、前置詞＋動名詞のうちの前置詞が省略されてできた」という仮説を立てるに至り、どこかにそのような表現形式があるのではないかと考え、探し始めました。

### 前置詞＋動名詞が幅をきかせていた

その過程でまずわかったことは分詞構文と進行形の関連です。昔の英語には進行形も分詞構文もなく、共にNorman Conquest(1066年)以降に用いられるようになりました。

次にわかったことは、進行形はbe + on ~ing「～し続けている」、またはbe + in ~ing「～の最中である」のonまたはinが簡素化されて成立したということでした。このことから、進行形を構成する現在分詞の～ingに「～していて」という意味が最初からあったわけではなく、省略されたonまたはinに「～を継続して」とか「～の最中」という意味があったことがわかります。つまり、「継続中＋～することを」だったのですが、その前置詞が省略された後も、～ingはその前置詞が表していた意味を受け継いでいると考えることができます。

He is in hunting.「彼は狩りの最中だ」

He is hunting.「彼は狩りをしている」

このことで筆者は非常に勇気づけられ、「進行形が前置詞＋動名詞からできたなら、分詞構文も前置詞＋動名詞からできてもおかしくない」と考えました。両者が形成されていく時代はちょうど重なるのです。

加えて、have difficulty (in) ~ing「～するのに苦労する」、spend a year (in) ~ing「～するのに1年かかる」、waste time (in) ~ing「～するのに時間を無駄にする」、be busy (in) ~ing「～するのに忙しい」、end up (by) ~ing「結局～になる」などの表現の～ingもすべて前置詞＋～ing(動名詞)に由来します。

筆者は、have difficulty (in) ~ingやspend a year (in) ~ingや進行形や～ingに導かれる分詞構文などに共通する母体とも言える「前置詞＋動名詞」が存在するような気がして探し続けました。

### 分詞構文の用法に対する素朴な疑問

分詞構文に関して、さらに浮かんだ疑問は「分詞構文の意味・用法は(分類の仕方にもよりますが)なぜ5～6なのだろうか」ということでした。いつ、どのようにして分詞構文の意味・用法は現在の数に絞られたのでしょうか、どこかにその基になる表現形式があるような気がしてなりません。

筆者の仮説は「～しながら」を意味する分詞構文の～ingは現在分詞、これ以外の～ingは動名詞というものになっていました。

### フランス語にヒントが

手がかりが得られない中、まず～ing語尾の歴史を調べてみることにしました。なぜなら、昔の英語では、動名詞語尾と現在分詞語尾は使い分けられていて異なっていたからです。それがいつ頃、どんな理由で同じになったのでしょうか。この過程に分詞構文に対する筆者の疑問を解く手がかりがあるような気がしたのです。

わかったことは、1200年頃(Norman Conquestの後であることにご注目)英語の現在分詞語尾は～inde、動名詞語尾は～ingだったのですが、その頃から現在分詞語尾の～indeに動名詞語尾の～ingが使われ始め、1500年頃には両者の語尾が～ingに統一されたということでした。

さて、ここに大きな手がかりが隠されていたのです。それは現在分詞語尾の～indeに動名詞語尾～ingが使われ始めたのがブリテン島の南部の方言だった点です。筆者は「おやっ」と思いました。三単現の-sの発生、名詞の性の消滅、singen(動詞原形)をsingeに、そしてsingにした動詞語尾の簡素化など、近代英語への主な変貌のほとんどがブリテン島の北部の方言から始まっていたからです。

現在分詞語尾の～indeに動名詞語尾の～ingが使われ始めた頃、ロンドンの支配階級はフランス語を話していましたし、大量のフランス語の語彙が英語に流入している時代でした。ロンドンブリテン島の南にあり、その南にはフランスがあります。さらにある文献に、フランス語では現在分詞語尾と動名詞語尾が同じなので(さかのぼると区別されていた)、英語がその影響を受けたのではないかと、というようなことが書かれていました。筆者は、フランス語を調べれば当時幅をきかせていた多くの表現に

共通する母体ともいえる「前置詞+動名詞」のヒントがあるのではないかと推測し、調べてみました。

### 分詞構文のルーツでは！

調べてみてびっくり仰天しました。フランス語に「前置詞(en)+動名詞(~ant)」を用いて、6種類の意味を表す表現形式が存在したのです。そして、その前置詞は口語では省略されませんが、文語では文字として確認しやすいためののか、なんと省略可能なのです。さらにその意味と用法が英語の分詞構文のそれに酷似していたのです。長い間追い求めてきた、多くの表現の母体とも言える「(前置詞)+動名詞」が存在したのです。

- ①「～していて、～しながら」(同時, 継続的)  
※英語の(in)+～ing「～の最中に」に相当。  
英語の進行形の発達に影響を与えたのではないかと筆者は推測しています。
- ②「～するとき、～して」(時, 瞬時的)  
※(after/on)～ing「～して」に相当。
- ③「～することによって」(手段)  
※(by)～ing「～して」に相当。この用法について、後に詳しく述べさせていただきます。
- ④「～のために」(理由)  
※(because of)～ing「～した[する]ために」に相当。
- ⑤「～すれば」(条件)  
※(by)～ing「～すると→～すれば」に相当。
- ⑥「たとえ～でも」(譲歩)  
※(in spite of)～ing「～にもかかわらず」に相当。

フランス語のこの表現の6用法を目の当たりにして考えたことは、英語の分詞構文はフランス語のこの「(前置詞)+動名詞」の6用法のうちの前置詞が省略されたもの、つまり文語の用法を借用したものではないか、ということでした。

### 「～しながら」を表す～ing 以外は動名詞

たとえば、on～ing「～するとすぐに」という表現がありますが、調べてみると1400年頃から使われ始めたことがわかりました。1400年頃といえば、分詞構文の使用が盛んになってきた時代です。ここ

で、最初のページの例文を再掲してみましょう。

On arriving at the airport, I called my friend.

Arriving at the airport, I called my friend.

この2つの文は、次のように考えてはいかがでしょうか。上のOn arriving...はフランス語の「(前置詞)+動名詞」の②の用法の口語用法(前置詞を省略しない)から英語に借用され、下のArriving...はこの用法の文語用法(前置詞を省略する)から借用されたものだと。

つまり、「～しながら」以外の分詞構文を導く～ingは動名詞であるとみなすことができます。この前提に立って考察を進めてみましょう。まずBecause I did not know what to do, I asked for advice.「どうしてよいかわからなくて、助言を求めた」という文の書きかえを試みてみましょう。

Because I did not know what to do, I ...  
Because of not knowing what to do, I ...  
Not knowing what to do, I ...

knowはofという前置詞に続けるために、～ing形にします。このことからknowingは動名詞であることがわかります。knowは現在分詞にして進行形には用いない動詞です。Not knowingのknowingは動名詞として用いられていると考えれば、今ほどの説明と矛盾しません。

分詞構文を導く～ingに最初から「理由」、「条件」、「譲歩」などの意味が存在したわけではなく、進行形の場合と同様に、これらの意味を表す前置詞(句)が省略された後も～ingがそれらの意味を受け継いでいるのではないのでしょうか。

### (by)～ing「～して」(手段)のすすめ

このあたりで、本稿のテーマである「手段」を表す分詞構文について述べたいと思います。フランス語の「(前置詞)+動名詞」の6用法のうちの③の用法です。これまで学習文法で扱われてきた分詞構文の用法に、この用法を加えることをお勧めします。この用法の存在を知っていると、読解する際に大き

な助けとなってくれるからです。『ジーニアス英和辞典』の kill の3番目に次のような例文があり、「手段」を表す用法と考えていいと思います。

She killed an hour (by) looking around the stores.

「彼女は店を見て回って1時間つぶした」

それから本稿の最初の例文の using equipment 「器具を使って」も using の前に by を補うことができるので、「手段」を表す分詞構文と考えていいと思います。

さて、この by についてですが、フランス語の場合、口語なら by が残され、文語なら省略されるのですが、筆者はこの by の省略について次のように考えています。英語では、「by が導く動作が身近で思い浮かべやすい動作の場合、by は省略される傾向があるが、その動作が初めて、あるいは意図して行われる行為である場合、by は省略されない傾向がある」と。たとえば、次の例では、by が導く動作が初めて行われる行為なので、by は残されると考えられます。

By planting plankton on Mars, we will be able to produce oxygen.

「火星にプランクトンを移植することにより、私たちは酸素を作ることができるようになるでしょう」

さらに、この (by) ~ ing の使い方をもう1つ紹介しましょう。フランス語の場合は、「手段」と「条件」を表すとありますが、筆者は分詞構文を説明する際にその用法にかかわらず、by を使った説明が可能な場合は by を使うようにしています。なぜなら、by は学習者にとって身近な前置詞だからです。たとえば、The boy raised his hand, sure that his answer would be correct. 「少年は自分の答えが正しいと確信して、手を挙げた」という文があるとしましょう。sure ... がなぜ「…と確信して」という意味になるのかを (by) ~ ing を使って次のように説明してはいかがでしょうか。

The boy raised his hand, by being sure that ...

The boy raised his hand, being sure that ...

The boy raised his hand, sure that ...

「少年は…と確信することによって→確信して手を挙げた」

学習者は、簡素化される過程を提示してもらうことで、なぜ sure だけで「確信して」という意味になるのか理解しやすくなると思うのですが。

もう1つ (by) ~ ing の使い方を紹介しましょう。分詞構文を説明する際、分詞構文は接続詞との関連で扱われてきましたが、むしろ省略されている前置詞(句) —after, by, because of, in spite of など— との関連がもっと強調されてもいいのではないかと思います。たとえば、Seen from a distance, the rock looks like a human face. 「その岩は離れたところから見ると、人間の顔のように見える」という文を次のように説明してはどうでしょうか。

When the rock is seen from a distance, it ...

By being seen from a distance, the ...

Seen from a distance, the ...

「その岩は離れたところから見られることによる→離れたところから見られると」

さらに、次の ~ ing を整理してみたいと思います (〈 〉は参考書などでの扱いです)。

including ~ 「～を含めて」〈前置詞〉

according to ~ 「～によると」〈群前置詞〉

supposing that ~ 「もし～なら」〈接続詞〉

considering ~ 「～を考慮すると」

(独立分詞構文詞)

これらの ~ ing は、いくつかの文法概念で別々に扱われているようですが、これらの ~ ing に共通する本質は次のようなことではないでしょうか。

(by) including ~

「～を含めることによると→～を含めると」

(by) according to ~

「～に合わせることによると→～によると」

(by) supposing that ~ 「もし～と仮定することによると→～と仮定すると」

(by) considering ~ 「～を考慮することによると→～を考慮すると」

つまり、これらの～ing はフランス語の「手段」あるいは「条件」を表す (by) ~ing の by が省略されたもの (動名詞) で、by が省略された後もその意味を受け継いでいると考えてはいかががでしょうか。これらの動詞すべてが 1200 年以降フランス語から英語に借用されたものです。

### 「結果」を表す分詞構文について

英語の分詞構文には「結果」を表す用法がありますが、フランス語の「(前置詞)+動名詞」の 6 用法には、「結果」を表す用法がありません。英語独自に発達したようです。この～ing も動名詞で、(and result in) ~ing の ( ) 内が省略されていると解釈してはいかががでしょうか。

The girl played soccer in the heavy rain,  
(and resulted in) catching a cold the  
next day. 動名詞

「その女の子は大雨の中でサッカーをして、翌日風邪を引いた」

### 最後に

分詞構文はこれまで主に接続詞との関連で扱われてきました。その理由の 1 つは、次のような例があるからではないでしょうか。

Though admitting what he says, I still  
think his decision was a mistake.

「彼の言うことを認めるとしても、私は彼の決断は誤りだったと今でも思う」

このような例があるため、admitting は接続詞と密接な関連があると考えられてきたように思われます。この点を調べてわかったことは、though ~ing とか when ~ing という形は、1600 年以降便

宜的に用いられるようになった、ということです。つまり、歴史的には admit を of の後に続けるために、admitting という動名詞形にし、その後 in spite of がいったん省略されたのです。

Though I admit what he says, I still ...  
In spite of admitting what he says, I still ...  
Admitting what he says, I still ...

時代が進むとこの Admitting の「～としても」という譲歩のニュアンスが相手に伝わりにくいのではないかと感じられるようになり、though が便宜的に添えられる場合も出てきたのです。

Admitting what he says, I still ...

Though admitting what he says, I still ...

このことから、上の admitting は接続詞と本質的に結びついているわけではなく、むしろ in spite of という前置詞句とより密接に結びついていると考えてもいいのではないのでしょうか。

最近の参考書や教科書は、本稿が動名詞とみなすことができると指摘した～ing のほとんどを現在分詞に分類し、hear him speaking Chinese 「彼が中国語を話しているのを聞く」の speaking (現在分詞) と同列に扱う傾向があるようです。

本稿が動名詞とみなすことができると指摘した～ing の動名詞的な側面や性質がもっと注目され、そのような観点からの説明や教材が工夫され、広がっていく、というのが筆者の願いです。

### 参考文献・辞書

大槻博(1993)『英語の疑問に答える』

小西友七・南出康世編(2011)『ジーニアス英和辞典 第4版』, 東京:大修館書店

中尾俊夫・寺島廸子(1988)『図説 英語史入門』, 東京:大修館書店

*The Oxford English Dictionary* 2nd ed.

Oxford: Oxford University Press

小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編(1988)『小学館ロベール仏和大辞典』, 東京:小学館